

ブルースト研究と病 — 吉田さんの「遺言」 —

和田 章 男 Akio WADA

フランス政府給費留学生試験史上初めて論文試験で満点、パリ高等師範学校へ留学、ブルーストの草稿研究、電話帳ほどの博士論文…留学から帰られた頃の吉田さんは既に伝説の人だった。帰国後大阪大学言語文化部に赴任され、当時同大学の文学研究科博士課程に在籍していた私の前に、「伝説の人」は当時流行していたパンチパーマに、黒皮のコートを風になびかせて、颯爽と姿を現された。飛び切りの秀才とダンディズム、今時の学者は違うなあと妙に感心したのが最初の出会いだった。ご自宅に招いて下さったり、親しく接していただいたものの、ブルーストについての修士論文を仕上げたばかりの私にとって、既にブルーストの世界的権威ともなられた吉田さんはあまりにも大きな存在で、ブルーストの話をすることも恐れ多かった。

吉田さんと親しく交際するようになったのは留学時代のことだった。私もなんとか給費留学生試験に合格し、1982年10月から1986年2月までパリ・ソルボンヌ大学に留学した。指導教官は吉田さんから紹介されたミシェル・レイモン先生。初めは草稿研究をするつもりはなかったが、2年目になってようやく草稿を調べ始めた。ブルーストの文字を読めるようになるには3ヶ月かかると聞いていたが、先輩たちの業績のおかげもあって、1ヶ月ほどでおおよそは読めるようになった。しかしながら関心のあるところだけを調べても何も見えてこない。草稿研究をするなら、すべての草稿を読むべし、草稿の内容はすべて知られていると考えるべし…下書き断片は互いに関連しあっており、またわずかなメモや言及も見逃すことができないこと、面白いテキストを見つけたからといって、それで研究業績になるわけではないことなど、吉川一義さん、吉田城さんという草稿研究の偉大なる先輩たちから伝わっていた貴重なアドヴァイスであり、また「神託」でもあった。そんなわけで私も毎日ただひたすらパリ国立図書館の手稿部へ通い続け、錯綜したブルーストのエクリチュールの迷路をさまようことになった。

吉田さんが再びパリに来られたのは、1984年の秋からの85年秋までのことだった。京都大学文学部の助教授という地位に就いておられたが、パリ東洋語学校の日本語教師を1年間務めることになられたのだった。貴重な草稿を読むための特別席で、ブルーストの下書きをひたすら書き写していると、吉田さんが

颯爽と入ってこられた。その時のことは今でもはっきりと覚えている。その頃、私は博士論文のテーマを「コンプレー」にすることに決めていた。かたや吉田さんには実に大きな仕事が依頼されていた。当時プレイヤッド叢書の『失われた時を求めて』の新版が企画され、準備段階にあった。新版の大きな特色は草稿資料をふんだんに取り入れることにあった。第1巻『スワン家の方へ』の第1部「コンプレー」は小説全体の要となる部分であり、草稿資料も豊富で、ブルースト草稿の専門家であるベルナール・ブランにその編集が任されていた。ところが体調不良のせいで、準備がはかどっておらず、編集長のジャン＝イヴ・タディエは急遽その大任をちょうどフランスにいられたばかりの吉田さんに託された。ブルースト草稿研究の立派な業績をお持ちの吉田さんの抜擢は当然とも思えるが、伝統あるプレイヤッド版の編者に日本人が加わることはかつてなく、またそれ以降もない。しかも第1巻第1部「コンプレー」はもちろん最初に発刊されるべきものであるばかりでなく、その草稿資料は膨大である。吉田さんに与えられた時間はわずか1年間だった。それも日本語教師の仕事をしながらのことであつたことを思うと、余人のなしうることではなかった。

プレイヤッド版の編集と博士論文執筆というように目的は異なるものの、吉田さんと私は「コンプレー」という共通のテーマのもとに草稿調査を同時期に行うことになった。当時ブルーストの草稿研究で博士論文を準備していたのは、日本人留学生としては、現在東京学芸大学教授の石木隆治さんと私、それにプレイヤッド新版の準備をしていたフランス人の研究者も加わり、特別席の10席がほとんどブルースト研究者によって占められる日も少なくなかった。1985年秋頃までは草稿のオリジナルを手にとって読むことができるというブルースト草稿研究の黄金時代でもあった。オリジナルを見ることができなくなったのは、あまりに多くのブルースト研究者が特別席に集結したせいだったかも知れない。それ以来、すべての草稿資料がマイクロフィルム化されたため、草稿帳の材質、紙の透かし、インクの色などの調査ができなくなってしまった。草稿を大量に取り入れることになる画期的な新プレイヤッド版の準備のみでなく、1984年秋頃に蒐集家ジャック・ゲランが所有していた13冊のカイエが国立図書館で公開されるようになったこともあって、ブルースト草稿研究が活況を呈していたのは当然のことだった。

そんな中、吉田さん、石木さんと私は肩を並べるようにしてブルーストの草稿に向っていた。楽しかったのは、この三人で昼食をとる時間だった。たいていは時間と金の節約のため（金の節約というのはもっぱら貧乏留学生の私のためだった）、サンドウィッチやハンバーガーなど簡易な昼食だったが、集中と

沈黙の時間からしばし解放されて、ブルーストとその草稿について夢中になって話し合った。無尽蔵の資料、偉大な作家の創造の息吹が直接感じられるオリジナルの草稿、ゆっくりと流れる異国での特別な時間、そして優秀な研究仲間たち、まさしく研究三昧といえる贅沢な時期だった。その頃、ある重要なタイプ原稿が定説より2年近く前に作成されていたことを実証することができた。わかってしまうとほとんど自明のこのように思われるほどだった。吉田さんに言わせると「コロンブスの卵」だった。博士論文を完成するまで秘密にしておきたかったが、吉田さんにはこの発見を告げた。さらにそのタイプ原稿の中の3層にわたる加筆訂正の時期を定めることにより、それとの比較からいくつもの草稿の年代設定や執筆順を明らかにしてゆくことが可能になった。吉田さんには逐一報告した。「和田君の発見を理解できるのは、世界に二、三人しかいないだろう」と言う吉田さんは紛れもなくその「世界の二、三人」の一人だった。吉田さんご自身着実に仕事を進められ、いくつもの貴重な情報や助言をいただいた。興奮と高揚の数ヶ月だった。

ところが、ある時吉田さんの身体に異変が起こった。大学都市近くの病院に入院されることになった。腎臓が悪くなったとのことだった。幼い頃に一度腎臓を患ったことがあるそうで、日本語教師としての仕事とプレイヤッド版の編集作業が吉田さんの身体に大きな負担を与えたのだろう。幾度か見舞いにも訪れたが、徐々に回復されて、国立図書館にも来られるようになった。当初は歩く姿もとても痛々しく、無理しない方がいいのにと思いつつ、パリ滞在の日々も残り少なくなっていたため、完全に資料収集を済ませたかっただろうと思う。まさしく命をかけた仕事だった。日本に帰国されてからも仕事の完成に勤しまれたのは言うまでもないが、足のむくみが激しくなり、ほとんど歩けなくなったという。結局透析を受ける身体になってしまわれた。

プレイヤッド版の編集をすることにより、文字通りブルースト研究の世界的権威ともなられたその年はまた病気との闘いが始まった年でもあった。にもかかわらずそれ以降の吉田さんの活躍は実にめざましい。数々の論文、著書、翻訳など個人的な研究ばかりではない。私が帰国してまもなく、関西においてブルースト研究会を作りたいので参加してほしいとの依頼を受けた。当初10名ほどのブルースト研究者が集まり、研究会は年に4回、会長も置かず、会費もなく、「アメンバー式」に、出入り自由な研究会にしたいとのことだった。ただ、言いっぱなしではなく、記録として残すために毎回報告書を作成している。このようなやり方のおかげで研究会は20年間にわたりとぎれることなく継続してきた。今では20名ほどのメンバーがいる。もちろん吉田さんが核であったこと

は間違いなく、ほとんど休まれることはなく、他のメンバーも吉田さんの批評、意見を聞きたくて集まってくるという側面は確かにあった。関西のブルースト研究会の活動がきっかけとなり、全国版の日本ブルースト研究会が設立されることになった。こちらは100名ほどの会員から成る日本のフランス文学関係の研究会としては最大規模のものとなった。

近年では「Proust sans frontières」というタイトルのもとにブルーストについての盛大な国際学会を企画、主宰された。京都で2日、東京で1日、計3日間にわたる学会で、フランス、イギリス、日本のこれほどの数のブルースト研究者が一堂に会したのは、日本では初めてのことであった。日本がフランスと伍すほどにブルースト研究の中心となっていることを世界に示すことができたのも吉田さんのお陰である。

また、体調が悪化する直前に応募された科研費（基盤研究（A））も見事に獲得された。それは「フランス文学における総合的生成研究」というテーマの共同研究で、私も研究協力者として参加しているが、この科研費はまさしく吉田さんの遺産となった。研究代表者を亡くしたものの、吉田さんの遺志を継ぐべく、現在共同研究を進めている。吉田さんが書かれた研究計画は私にとってほとんど「遺言」のように思える。そこには今後発展させてゆくべき生成研究の重要な三つの観点がある。これまでの生成研究は草稿研究とほぼ同義であったが、これからの生成研究は草稿のみを対象とするのではなく、文学・芸術の伝統や同時代の潮流、あるいは文化的・社会的背景の中でどのようにテキストが生まれてきたかを問題にしてゆくという、よりスケールの大きな研究をめざすこと。このような観点をとることにより、たまたま草稿が残っている近代の作家のみでなく、草稿資料が現存しない作家の作品をも生成研究の対象とすることが可能になる。次に、これまでは作家ごとに異なった方法によって個別に研究されてきたが、共通した方法論を構築することによって、個々の創造過程、創造様式を比較し、相対化してゆくことで生成研究をより普遍的な研究にしてゆくこと。そして最後に「草稿を開くこと」。これは私自身の言い方であるが、草稿を同時代の文化的・芸術的現象と関連付けることを生成研究のひとつの目的として掲げておられ、「テキストを開く」という言葉を応用するなら、「草稿を開く」という表現がふさわしいように思う。ブルーストの場合を考えるなら、印刷された最終稿よりも下書きの方にはるかに多く実在の固有名が含まれている。つまりブルーストにあっては実在の固有名を徐々に架空の名へ変えてゆく傾向が強いということだ。実在の人名、地名、作品名などには現実のレフェランがあるわけで、同時代の文化的・芸術的・歴史的事象と関連づけることが

容易となる。しかも草稿の執筆時期をできる限り正確に定めることによって、作品の創作と、作家の読書、体験、見聞、調査、旅行、交友、展覧会や演奏会の開催などと関連づけることが可能になる。このように吉田さんはスケールの大きな生成研究をめざしておられた。

また吉田さんほど日仏の学術交流に貢献された方も少ないだろう。実に多くのフランス人学者を日本へ招聘し、きめ細やかなお世話をされていた。吉田さんのもとにはほとんど絶え間なくフランス人の研究者が来ていたと言っても過言ではない。そのように多忙であったにもかかわらず、教育に対する熱意もまた人一倍持っておられた。一人の学生のために勉強会を開いたりされていたことには頭が下がる思いだ。それも近年では週に3回の透析をしながらのことだっただけに、ほとんど超人的と言ってよい。われわれの前ではいつも明るく元氣一杯で、重い病気と闘っておられることをつい忘れてしまうほどだった。

「光があるうちに歩め」 — 喘息の病を抱えていたブルーストは、聖書のこの言葉を掲げ、自らの命の限界を見定めつつ、大作にとりかかった。吉田さんとブルーストが重なって見えてくる。発病以来20年間実に多くの事を成し遂げられた。しかしまだまだやりたいことがあっただろう。研究に終りはない。人の生は遅かれ早かれどこかで断ち切られてしまう。吉田さんが命を削って書かれた論文の一つひとつは今や「遺言」となった。吉田さんの元氣な声を聞くことはもはやできない。けれども吉田さんの著作はいつまでもわれわれに語りかけてくれるだろう。

(わだ・あきお 大阪大学教授)